

白川郷合掌造り集落の保存

黒田乃生¹⁾

所属 1) 筑波大学 芸術系

1 はじめに

「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は 1995 年に世界遺産に登録された。「合掌造り」と呼ばれる大きな茅葺きの建物が特徴で、岐阜県北部から富山湾に流れ込む庄川沿いに点在する三つの集落が登録資産である。岐阜県白川村荻町はその中でももっとも大きな集落である。「白川郷」は近世までは 42 の集落のまとまりだった。しかし、市町村合併でかつての「白川郷」の南半分の旧荘川村は高山市に編入され、北半分の白川村は単独村の道を選んだ結果、その領域は曖昧になってしまった。現在の「白川郷」は、世界遺産である白川村荻町を指す場合がほとんどである。白川村荻町は人が生活する世界遺産である。本稿では白川郷だった 42 の集落のなかで荻町集落だけが世界遺産になった経緯をふまえて、生活の場が世界遺産になることで起こるさまざまな課題を考察する。

2 保存のはじまり

白川村の「保存」のあゆみは 1970 年代にさかのぼる。1974 年に荻町の住民が「白川郷荻町の自然環境を守る会（以下「守る会」）を結成し、合掌造り家屋の保存がはじまったことは知られている。全国でももっとも早い時期に集落の保存を始めた長野県の妻籠に倣って、当時の「守る会」のメンバーは合掌造り家屋を「売らない、貸さない、壊さない」ことを決めた。多くの合掌造り家屋が移築されたり壊されたりする中、住民ひとりひとりを説得し保存に向かって動き出したのである¹⁾。高度経済成長期に開発と逆行する「保存」を決め、異なる考えの人を説得するのは並大抵の労力ではないが、荻町には未来をイメージしそれを実現するための労を惜しまない人々がいたのである。活動の中心になったのは戦争から復員した荻町の青年たちだった。「最初は文化財を保存するという高い見識じゃなくて、どうやってこの村で自分が飯を食っていくかというところから発足していったという気がします。」という言葉とおりの、その目的は「保存」よりもむしろ村の将来を見据えての「なりわい」の模索であった²⁾。2011 年に「守る会」結成 40 周年を記念して当時の様子を振り返る懇談会が開催された。関係者の発言からは、当時計画されていた工場誘致が頓挫したこと、メンバーの親戚で小説家として活躍していた江夏三好のアドバイスがあったこと、民宿や食堂の開業は役場職員と村議会の後押しですみやかに許認可申請の手続きが進んだことなど、さまざまな要因がかさなって観光と保存にむかって漕ぎ出す力となったことがわかる。中でも、現在集落はずれにある食堂建設の経緯が興味深い。

I さんが上町で食堂をやるとい話があがりました。上町なんかにお客さんが行くわけないと多くの人が思っていた。しかし、Y さんや I さんは、私たちがやってみせないと誰もやらんし合掌は無くなってしまう。移築してきてでもやってみせまいかと。民宿が軌道にのったことで（略）うちもやってみようかという動きになり観光関連業者が急激に増えてきたということです³⁾。

荻町の南、上町にある合掌造り家屋の一部は 1970 年代に移築されたものである。白川郷の世界遺産の価値は合掌造り家屋が日本のほかの地域では見られない「特異な」形態、



図 1 1970年代に移築された合掌造り家屋

その建物がたくさん残っている「特異な農村景観」が価値とされている。しかし、移築されたこれらの建物が作り出す風景は農業といういとなみの中で形成されたものではなく、観光用につくられたものである。世界遺産がもとめる「ほんものであること（オーセンティシティ）」を厳密に問えば疑問の声もあがるだろう。しかし、現在多くの写真に撮影され世界遺産白川郷の顔になっているだけでなく、住民にとってこの風景は「家に帰ったとほっとする」ものになった（図1）⁴。現在は世界遺産の保護への「観光」による負の影響が注目されることが多いが、白川郷では観光が軌道にのったからこそ保存が進み、保存できたからこそ観光がなりわいとして続けられているのである。

3 世界遺産登録とその後

世界遺産登録は白川郷の住民には直前まで知らされておらず「寝耳に水」のできごとであったともいわれている。世界遺産条約を日本が批准したのは1992年で、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」以前に登録された文化遺産は「姫路城」、「法隆寺地域の仏教建造物」、「古都京都の文化財（京都市、宇治市、大津市）」の3件のみであった。世界遺産登録がトップニュースとして報道される現在とちがい、そもそも世界遺産とは何なのかさえわからない状況の中、荻町の住民への説明会が開催された。1994年9月に暫定リスト入りが新聞で報道されたことで、「どうやら『世界遺産』というものになりそうだ」と知った人もいたようである。白川村荻町は1976年に全国で初の重要伝統的建造物群保存地区のひとつとして選定されており、国の文化財として建物の新築や改変が規制されていた。説明会で、文化庁の担当者と当時の「守る会」会長から「世界遺産になっても文化財よりも規制が厳しくなることはない」と聞いて世界遺産に賛成した人も多かったという⁵。もちろん全員が賛成というわけではなく反対する住民も中にはいた。世界遺産登録の国際的な動向として、1992年には「文化的景観」の概念が導入され、人間が自然に働きかけてつくりあげた庭園、棚田などに世界遺産としての価値が認められるようになったことが大きな転換点となつたとされている。為政者の作った、いわゆるエリート建造物からごく普通に生活する人々がかかわって作られたものへと評価の対象が拡大したのである。こうした国際的な時流をと

らえて文化庁の担当者が白川郷を世界遺産にできると考えた戦略が功を奏したともいえる。

4 車両の乗り入れ規制と駐車場問題

登録後のもっとも大きな決定のひとつに観光車両の乗り入れ規制がある。荻町は集落の中央を村道が南北に通っている。明治期につくられたこの道は集落を直線で貫いているが、世界遺産推薦書には約 100 年の歴史があり荻町の歴史の一部であると説明されている。世界遺産登録時は観光用の駐車場は遺産の範囲外にある財団法人世界遺産白川郷合掌造り保存財団が管理する「せせらぎ駐車場」と、集落の中央にある荻町が管理する区の駐車場の二箇所あったが、集落の中の荻町区の駐車場は廃止して観光客の車の乗り入れを規制するべきだという専門家からの指摘があったという。その後 2001 年に車両の乗り入れ制限の社会実験が実施されたが規制には至らなかった。2000 年代後半から全国的な公共事業の縮小の波が小さな白川村にも押し寄せた。多くの建設会社が倒産し、生活のために自分の土地を使って世界遺産地区内や周辺で新しく観光駐車場を始める人が現れたのである。財団が管理するせせらぎ駐車場の料金は普通乗用車 500 円で、個人経営の駐車場も同じ価格設定である。財団の駐車料金の一部は協力金として建物の修理や景観の保全に使われているが、個人の駐車場からは協力金は得られない。世界遺産地区内に駐車場が点在するのは美観を損ねるということで、荻町の住民による話し合いが重ねられた。その結果、2006 年度からは主に毎月第 3 金曜日と土曜日に限って試行され、2009 年度からは集落への大型車両の乗り入れ規制が始まった。2010 年に策定された「白川村世界遺産マスタープラン」では地区内に観光客の車を入れないという大きな方向性を打ち出したが、すでに営業している駐車場をどのように撤退させるのか具体的な方法は定まっていなかった。2011 年には個人が経営する有料駐車場が「守る会」が定めるガイドラインに違反していることを記載した文書が荻町区民に向けて発表され⁶、2012 年には集落の中にあった区が経営する荻町駐車場が廃止された。この駐車場問題はテレビでも報道された。個人の経営者は「生活がかかっている。」「規制が始まる前から駐車場をしていたし、世界遺産ではなくても観光客は来ていた。」と語り、観光客からは「景観的によくない」というコメントが、「守る会」会長は「すでに駐車場をやめたところもあるのでありがたいし今後も理解をしていただくよう努力する」と答えた。2014 年には午前 9 時から午後 5 時までの世界遺産地区内への車両進入を規制がはじまり、個人経営の駐車場はすべて廃止された。2007 年の話し合いの時には「(車両の通行) 規制を行うと直接影響を受けるが、(略) 死ねということか⁷」と強い言葉で反対した個人の駐車場経営者も結果的に駐車場を廃止したのである。

交通問題の解決は 20 年という歳月をかけて行われた。なぜもっと早くできなかったのか、強制的にできなかったのか、という意見もあるだろう。人口数百人の集落には反対者も賛成者もいて、互いの家庭の事情がよくわかる状況の中で、守る会や荻町の区長が少しずつ前進させて問題を解決した。遠回りに見えるこのやりかたこそが白川村と「守る会」が長年培ってきた最善の方法なのだと思う。観光客やマスコミの人の厳しい意見を借り、研究者らが懇談会の開催をマネジメントするなかで大きな流れを醸成し、最終的な廃止に至ったのである。

5 ひろがり

僕たち 3 人が来て 1 年強、
村の既存の文化と、僕たちが来たことで起きた風から
新しい結びつきが生まれ、少しずつ変化の波が起き始めました。

地域おこし協力隊のフェイスブックの言葉である⁸。白川村に新しい変化が訪れている。村の存続と保存にむかってがむしゃらに頑張ってきた第一世代が交替し、少し肩の力を抜いて広くまわりを見ることができる第二世代が現れてきた。世界遺産以外の地区では、「世界遺産だけじゃない、白川村」をアピールするさまざまな活動が繰り広げられている。白川村の人口は 2015 年 4 月で 1657 人になり 10 年で 16%減少した⁹。高齢化率は 32%で、全国平均 25%を大きく上回る。

世界遺産登録の課題の一つに「地域格差」がある。図2は世界遺産登録の1995年を100とした場合の地区内外の観光施設および白川村全体の入込みの割合の推移である。村全体では、世界遺産登録時の77万人が、最も多い2008年で186万人に増加した。せせらぎ駐車場に隣接する野外博物館合掌造り民家園も同様の推移を示している。一方、世界遺産の地区から約13km南の御母衣という集落にある旧遠山家住宅は1995年には約2万人の入りこみがあったが、2010年は約5千人と約4分の1に減少した。遠山家は昭和初期からいわゆる「大家族制」で有名になった合掌造りの建物である（図3）。世界遺産登録の28年前の1967年から観光客に公開し、1971年に国の重要文化財に指定された。世界遺産登録後は荻町に観光客が集中し、結果として遠山家の来訪者は減少したのである。東海北陸自動車道が開通したことで、世界遺産へのアクセスが遠山家の前を通る国道を北上するルートから、逆の方向にある白川郷インターチェンジから南下するルートに変化したことも減少に影響している。

白川村では何度かホテル建設の計画が浮上し、地域外の資本が入ってきて客を奪うのではないかという不安から民宿の経営者らによる反対運動が行われてきた。村にある自然体験型の宿泊施設であるトヨタ白川郷自然学校を建設するときもフランス料理を基本としたサービスで白川村の民宿や旅館と棲み分けることで承認されたという。結果としては施設で働く従業員や自然解説員が積極的に地域の活動にかかわり、プラスの影響が大きかったと考えられる。2010年代にはいり、観光客の滞在時間を延長し消費単価をあげ、村民の雇用の増加も見越したホテル誘致が村によって進められている^{10, 11}。一方、世界遺産に隣接した地区に「ゲストハウス」がいくつかオープンした。相部屋だが安く宿泊できるゲストハウスは土日は予約で一杯とのことである。高山や金沢などに比べ白川村の「観光地」としての歴史は古くない。今後は多様な宿泊サービスの提供が、観光地として生き残るためには必要になるだろう。

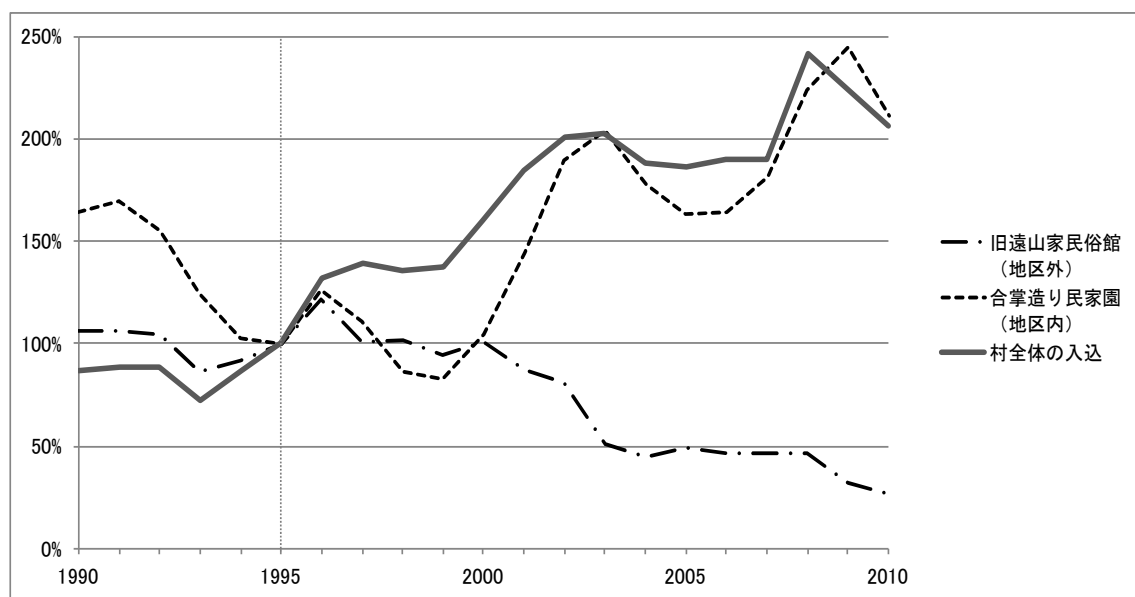


図2 観光客数の推移
(世界遺産登録の1995年を100とした数値)



図 3 旧遠山家民俗館

2014年には白川村の南部地域の有志による「白川郷鍋食い隊」が「白川郷平瀬温泉飛騨牛すったて鍋」を開発した。昔から白川村の宗教行事に供されていた大豆からつくる「すったて」という汁をベースに飛騨牛や村特産のキクラゲを入れた鍋は「ニッポン全国鍋グランプリ」で2014年優勝、翌2015年準優勝という快挙をなしとげ、マスコミを賑わせた。課題であった汁の長期保存もレトルトパックすることで可能になり、鍋をメニューとして提供する飲食店も南部地区を中心に少しずつではあるが増加している。

2009年から始まった総務省による地域おこし協力隊の事業は受け入れ先の行政や隊員の資質などで多くの課題を抱える地域もある。白川村では2014年に3名だった地域おこし協力隊は2015年には7名に増員され2016年7月で6名の隊員が活動している。いずれの年も若干名の枠に数十名の応募があり、数名に絞るのが困難だったというほどの逸材揃いであったという。協力隊員に話を聞いたところ、「『世界遺産』の保護や制度のことは詳しくないし、あまり考えたことがない。」という。さまざまな仕掛けをして、どうやって村を面白くしていくかに目標があり、それぞれの得意分野を生かして精力的に活動している。興味深いのは、村の人たちどうまく協力しながら新しいことを楽しそうに活動しているところである。空き家を自分たちで修理してシェアハウスをつくり、同時に移住者を募集する、白川村で取れた山菜を東京でおしゃれに調理して食べてもらう、2013年にトヨタ白川郷自然学校の自然解説員が中心に立ち上げた「白川郷白山トレイルクラブ」は隊員も参加し活発な活動を展開している。これらの活動はテレビや雑誌などでもたびたび取り上げられた。いずれも世界遺産がある白川村であることをきっかけに、世界遺産の荻町以外の地区を中心に盛り上がりを見せている。

6 おわりに

世界遺産登録によって規制が厳しくなることを懸念していた荻町の住民のなかには、登録後は規制を厳しく守らなければという意識に変化した人もいて、小さな現状変更にも申請が出るようになったという¹²。世界遺産になった自覚が変化させたのか、あるいは世界遺産になったことで外野の声がより大きくなり変化を促したのか、おそらくその両方であ

ろう。登録後、「守る会」は現状変更申請の協議だけではなく、集落内への観光車両規制を検討したり、世界遺産マスタープランの策定を牽引したりと次々に降りかかる問題に対応してきた。構成員も保存を進めた初代から代替わりした。メンバーのひとり「(守る会は)人の利害に関わり緊張する場面もあるもんで、できれば休みたいなあと思いながらもみんな苦しん(ママ)やでと思い参加してきました。」と言う。互いの暮らしがわかるからこそその困難や喜びがある。

現在の第二世代が仕掛けている新しい活動は、じつは荻町が保存を決めた時期に上町に合掌造り家屋を移築して食堂をはじめた第一世代のしたことと似てはいないだろうか。戦後の混乱の中で復員した青年たちが村の将来を見据えて観光をなりわいに定め、合掌造り家屋の保存をはじめた。まず自らが先頭に立ってうまくできることを示し、地域全体が動いた。同じように、人口減少が進み将来の選択肢が多様になり、世界中の人が訪れる時代にふさわしい柔軟な動きが始まったといえる。

世界遺産を目指す多くの地域にとって登録は到達地点であり大きな目標である。しかし、白川村にとって、世界遺産は決して「目標」として得た称号ではなく、保存を続けた結果の必然であった。世界遺産は村の長い歴史の通過点であり、うまく利用して地域を次世代に繋ぐツールと捉える必要がある。「心ない人に世界遺産が壊される」「世界遺産の観光 VS 保存」など、世界遺産は解りやすい構図で喧伝されることが多い。しかし、少し俯瞰すれば、社会の大きな流れに影響を受けながら個々の生活が営まれているのはどの地域でも同じである。白川村には世界遺産を糧に観光に従事する人もいれば、そうでない人もいる。「地域住民」という言葉のあやうさは、それを主語として語ることで、全てを代表しているわけではないにもかかわらず総意であるかのような印象を受ける点にある。白川村では「守る会」のメンバーも、村役場の職員も、民宿のおかみさんも、屋根葺き職人も、皆「住民」である。さらに、数多い白川村研究者のなかには村の教育長まで勤めた方や、村に住み込んで役場の非常勤になり、マスタープランや観光計画の策定に奔走した人もいる。「産官学の協働」などという大上段のフレーズを使わなくても、白川村に関わるさまざまな立場の人が村でできることを実行した結果、現在があることを忘れてはならない。

- 1 黒田乃生 (2013) 合掌造り家屋と集落の再生:ー白川郷と五箇山の事例ー, 農村計画学会誌 32(2), 117-120
- 2 柿崎京一 (2011) 「守る会」結成に駆りたてた原動力はいかにして生成されたか, 白川郷荻町集落 40 年のあゆみ, 白川郷荻町集落の自然環境を守る会, 23-27, 42
- 3 第 1 回「守る会 40 年を振り返って」活動者懇談会議事録 (2011) 白川郷荻町集落 40 年のあゆみ, 白川郷荻町集落の自然環境を守る会, 29, 実名をイニシャル表記に変更
- 4 黒田乃生 (2007) 世界遺産白川郷 視線の先にあるもの, 筑波大学出版会, 133-134
- 5 鈴口茂ほか (2011) 第 1 回「守る会 40 年を振り返って」活動者懇談会議事録, 白川郷荻町集落 40 年のあゆみ, 白川郷荻町集落の自然環境を守る会, 37-38
- 6 尾崎清ほか (2011) 第 2 回「守る会 40 年を振り返って」活動者懇談会議事録, 白川郷荻町集落 40 年のあゆみ, 白川郷荻町集落の自然環境を守る会, 45-48
- 7 白川村、白川村教育委員会、白川郷荻町集落の自然環境を守る会、(財)世界遺産白川郷合掌造り保存財団 (2011) 「荻町伝統的建造物群保存地区内の『有料駐車場』の考え方について (お願い)」 <http://shirakawa-go.org/kankou/files/parking2.pdf>
- 8 荻町交通対策委員会 (2005) 荻町新交通システム計画書、13
- 9 白川村地域おこし協力隊 Facebook 2015 年 3 月 31 日
<https://www.facebook.com/vill.shirakawa.heritage.mgr?fref=nf>
- 10 「広報しらかわ」(2015) No.525, 24
- 11 成原茂 (2014) 新年のごあいさつ, 「広報しらかわ」 No.510, 2
- 12 中日新聞 2015 年 4 月 19 日
<http://www.chunichi.co.jp/article/senkyo/chiyosen2015/gifu/CK2015041902000213.html>
- 13 鈴口茂ほか (2011) 第 1 回「守る会 40 年を振り返って」活動者懇談会議事録, 白川郷荻町集落 40 年のあゆみ, 白川郷荻町集落の自然環境を守る会, 46, 47